

# 海軍

毎日の砲爆撃に耐えぬいた

海軍第八一警備隊

愛媛県 萩 山力 君

愛媛県現在の北条市庄甲、農家の長男として生まれましたが、先生になりたくて農協の技術員をしながら、また農業の家事を手伝いながら農業に関する勉強をしていました。兵隊検査は、昭和十二年徴集、第一乙でしたが、当時は現役ではありません。

大正六年六月二十五日生まれの私に召集がきました。しかも海軍という思いもよらぬことでした。戦争中とは申せ、昭和十八年一月二十三日結婚四カ月、しかも

妻は妊娠中という五月でした。

六月十五日、佐世保第一海兵団入団となりました。北条から召集兵は三名で、歓呼の声に送られ、お宮に参拝して北条港から佐世保へ引率されるため呉へ、佐世保までは列車、途中何人が合流したような記憶があります。

海軍二等水兵となり、六月二十日館山海軍砲術学校入校を命ぜられ、直ちに軍用列車にりましたが、窓は閉められていました。同年兵はほとんど一緒でしたが、それぞれの兵科に分けられ、私は信号兵となりました。砲術学校だがいろいろの兵科があります。

信号兵としての教育は手旗が主力ですが、他隊との電信を聞き、電池で無線器を動かす。防空壕の中で受信する。生の通信でした。九月五日、防空隊が編制さ

れ、命令が出て七日、横須賀発、ラバウル行きの御用船でした。防空隊にはいろいろの兵種の人が乗っていました。

その頃は敵の潜水艦が出没している時期でした。横須賀を出航してから、もうすぐ戦闘配置。こちらには火炮が無いのですから、攻撃されたら一コロ、防空隊だから照空灯や十三ミリ機関砲など隊の兵器はあつても、船には装備が無いわけです。

トラクク沖を通つて直航しました。「散れよ桜花」と心に決めていて死は恐れなかつたのです。船は大きく、古い兵隊が見張りをしていました。私は新兵だから何もできません。

カロリン諸島を通つて上陸しましたが、その日時は忘れました。隊は南東方面艦隊付属で防空隊は第八十一警備隊になります。

—ラバウルの任務についてお話をしてください—  
私は砲術学校を出てから、もちろん、ラバウルへ出発してから内地との便りはありません。学校出発も知らせないので、私の勤務日時は終戦まで家に知

らせられないし、内地のこともわかりませんでした。

戦闘の状況について、艦砲射撃はありましたが、ほとんどが英軍機の空襲で随分ひどかったものです。その上、食べる物もなく、芋を植えました。一年に三度芋が採れます。隊員は年配だし、農業を勉強している者もおられない。農家の者も少なかったので、空襲に逃げながら自活しなければなりませんでした。

マリアナ諸島のサイパン、テナアン、グアムもやられ、硫黄島も玉砕となりました。連合軍としてはラバウルは日本軍の大きな基地なので空襲や艦砲射撃の連続です。我が軍も初めは抵抗して戦いましたが、そのうち撃つ弾が無くなる。私は第三飛行場におりましたが、敵は電波探知器で我々の行動を知っていました。山本長官機の動きはスパイによつて敵に知らされていたといえます。

我々は手も足も出ない、やられっぱなし。私はマリアにやられ、高熱と悪寒に栄養失調となり悩まされました。病人も負傷した者も内地へ送還することはできない。食料は補給されないのだから、蛇も蛙も食べ

る。まったく餓鬼の世界で、他人の食べる芋でも自分の芋より大きく見え、奪って食べたい気がするほどで、まったくあさましい限りです。

爆撃がひどいので、敵機が去った後、爆風で砂に埋められた兵隊を助けようとしたら、腰から下が無い者もいました。首だけ出している者も助けることもできない。連続爆撃と低空で機銃掃射されるからです。十三ミリ機関砲が当たったら出血多量で死んでしまいました。

私たちは、軍事教育で最後まで負けるなどとは考えませんし、家のことも忘れ、生きることがやっとでした。夜は、我々のことを眠らせぬために爆撃する。部隊の任務は第三航空飛行場を守ることですから他へ移動することはできません。機械が無いので爆撃された飛行場の穴の整地はシャベルで人力でやるしかありません。

終戦になってやって来た連合軍はブルドーザー、我々はモッコを二人で担いでやる。機械力と人力の差をまざまざと見せつけられました。

このような人力だけでは修理もできず飛行場はほとんど使えなくなりました。制空権も制海権も奪われ、戦闘機能を無くさせ、我々のニューブリテン、ラバウルを置き去りにして、敵の主力は北上し、本土を攻撃していたのです。我々にはそういう情報も入らず、ただただ耐えながら死守していました。我々の隊は、二月二十四日、第十一航空艦隊付属、第一〇五航空基地隊付きとなりました。

その間、私の留守宅では、妻から子が出来た知らせを砲術学校で受け取りました。ですから子供に会えたのは復員してからです。

ここで、萩山さんがラバウルへ行かれる前、連合軍が巻き返しをしている間の状況と、終戦になった時の日本軍の兵力について、お持ちになった資料から説明していただきたいのです。

私は昭和十八年後半から十九年―二十年の終戦までラバウルに勤務していたのです。今お話のあった終戦時の兵力は資料によれば次のとおりです。

日本軍

〔海軍關係兵力〕

南東方面（第十一航空）艦隊司令部 二、八〇〇

第八一、八四、八五、八六警備隊 四、五〇〇

横須賀第八特別陸戰隊 一四〇

第九五八海軍航空隊 五〇〇、第一〇三航空基地隊  
四、三〇〇

その他の部隊（第八潜水基地隊、第八港務部、第八

通信隊、第八海軍經理部、第八海軍病院、第八海

軍工作部、第八海軍軍需部、第一〇八海軍航空廠、

第二・第三防疫班、第二八・第三八・第一〇一・

第二一一・第二一二設營隊、第一四根拠地隊派遣

隊（特務部）一、六〇〇

合計一三、八四〇名

〔陸軍兵力〕

第八方面軍司令部 二、三〇〇

第十七師団（含独立混成第三九旅団）一七、〇〇〇

第三十八師団 一七、〇〇〇

第九砲兵団（野戰重砲兵第七連隊、独立野戰重砲兵

第五大隊、独立重砲兵第三大隊、独立白砲兵第一

六大隊等）、戰車第八連隊、その他方面軍直轄部

隊、独立混成第三・第一四・第三五連隊、海上機

動第一大隊、第七遊撃隊、第八方面軍通信隊司令

部、通信第一六・四七連隊、第八固定通信隊、第

八特殊情報部、第八建築部、第六野戰憲兵隊、独

立自動車第三八大隊、第三二道路隊、第一四野戰

郵便隊、近衛師団第七陸上輸卒隊、特設陸上勤務

第二・第三・第四・第六中隊、特設水上勤務第二

〇中隊、特設建築勤務第二七中隊、第一四兵站衛

生隊本部、患者護送第五三、第六三、第七三、第

七六小隊、第六七、第一〇三兵站病院、第一六兵

站病馬廠、第二四野戰防疫給水部、第二六野戰兵

器廠、自動車貨物廠）七、八〇〇

合計 四四、一〇〇名

〔記錄〕

ブーゲンビル島沖海戰（十八年十一月一日〜十九

年二月十七日、トラック島引揚げまでの間）一〇六

日間

一、ラバウルで受けた敵機の空襲回数 四、四一八回、一日約一五〇機の来襲あり。我が航空隊出撃回数 八九六回、一日約五〇機の出撃。

二、昭和十七年二月、ラバウル占領より終戦までの我が軍の損害 兵員約二三万、沈没艦艇七〇隻、沈没船舶一一五隻、航空機約八、〇〇〇機（終戦時、実働飛行機二機）

軍港としてのラバウルの思い出

ラバウル軍港は南北約六湮半、東西約二湮の広さ、東方に港口を開き、平均二、三〇〇メートルの丘に取り囲まれている。高い山（噴火口）から熔岩が海に入り水蒸気が立つ、熱帯とはいえ気候は比較的しのぎよい（朝は冷え、日中は十二月が一番暑い—南半球であるから）

昭和十七年一月二十三日占領、前進基地とし、ソロモン、ニューギニアへの足場としていた。ソロモン方面作戦で検舞台となり、日夜数十隻の艦船が入港し軍港のようであった。

ラバウル港は水深が急に深く、水際付近の投錨適地が狭いので、港務部では錨地設定に苦勞していた。水際百メートルで深さ百メートルと深い湾であった。棧橋は大部分が陸軍の管轄下になっていて、船舶司令部、停泊司令部と、海軍側は使用の度に陸軍と打合せ棧橋を使用していた。

ラバウル軍港には、戦艦、空母は一隻も入港できなかった。空襲による被害の恐れもあって、ソロモン作戦の時もトラック島から行動していた。空襲の激しさは前に申したとおりであります。

私たちが上陸したのは、ソロモン、ブーゲンビル沖海戦の最中でした。飛行場警備が任務なので上陸以来、平穏な日はありませんでした。戦争に行ったのだから覚悟はしていたのですが、有り難いことに海軍でした。陸軍部隊はニューギニアからツルブに渡って、ラバウルまで歩いて来ました。陸軍の兵隊は途中で随分死んだでしょう。もし私が陸軍だったら、これだけの道を、食料も無く歩いたのだから死んでいたでしょう。

ラバウルでは塩分は海水から取り、芋だけを食べ

いました。死んだ人は哀れでした。毛布へくるんで油をかけて焼く。煙や火が上から見えたら空襲される。

敵と直接対決ではなく、海からは艦砲射撃、上からは飛行機、食料も医療品もない。病院の建物はあつても軍医はいない。衛生兵のみだから病名も分からず包帯を巻くだけ、熱があれば水で冷すぐらいです。薬もありません。

私はマラリアにかかり「かんてい山」の野戦病院に入りました。水があつたので冷すことはできましたが、喉が渴いて、水を食べた者はほとんど死んでしまつたのです。あの時梅干にお粥があつたらと思いましたが、「散れよ若木の桜花」と言つて「死ぬのが男の本分」として教育を受け、「死ぬことが父や母に喜んでもらえる」という教育だったので。

悪寒と高熱の連続で、薬は無く気力だけ、十六貫（六十キロ）の男が十一貫になつてしまいました。食物は芋だけ、よくぞ生きたと思ひました。空襲警報が出ると寝ても命令で穴に避難しなければならぬ。病院の防空壕は横穴、一般の壕は溝を掘つて体を横に

するぐらいのものでした。

我々の部隊は飛行場警備ですから、飛行場から離れた安全な場所へは行けないから分散程度でいます。兵舎とわかれば銃・爆撃されるわけです。バナナと椰子とジャングルの中、椰子の葉で屋根を葺いた掘つ建て小屋のような家。床は地面より上げていますが、スコールが来ると椰子の葉しんじの屋根からは水が漏れます。召集兵の中には大工もいるので、家を建てたり修理はできました。

そのような生活をしながら、終戦まで毎日空襲で、夜もやられるから安眠できない、敵は神経戦で、ドン爆撃をする。こちらには飛行機も無い、無抵抗で逃げるだけです。低空で機銃掃射もされる。機関砲の弾は口径が大きいから、当たれば出血多量で死んでしまふし、負傷しても十分な治療もできない。朝起きて「ああ俺は生きてる」という毎日でした。

——終戦を知つたのはいつ頃でしたか——

終戦は無線で分かりました。私の任務は通信でしたから、だが、信じられませんでした。終戦と同時に、

現地住民は強くなりました。

その後、英、豪軍の監視下、命令で武装解除になり、武器・弾薬を集め、船で出て行き海に投棄しました。

ラバウルに着いた当時、初めは探照灯で照らし砲や銃を撃ったのですが、翌日は報復爆撃もされるし、弾もだんだんとなくなつたので、射撃もできなくなりました。したがって終戦の時は、小銃や軍刀ぐらいしかなかったのですが、連合軍側も形の上でも武器弾薬は全部処理されました。

その後俘虜として、飛行場の修理の使役でしたが、今度は逆に現地人に使われる身となり、敗戦の悲哀さを味わいました。食料は缶詰の飯とかが主計科から支給になりました。戦争中は支給がなかったのが、終戦になってから良くなった（予備の貯蔵食料支給）わけです。豪軍の占領下で作業もし、食料の配給も受けるようになりました。

敗戦のショックはありましたが、毎日、昼夜を分かたぬ空襲や戦闘から解放され、生命の危険はなく、恐怖心もなくなり、幾分体力も回復しました。病は気か

らといいますが、心から安らかとなり、健康もだんだんと取り戻していききました。

帰国は昭和二十一年五月、名古屋港に着いて復員となりました。出迎えの人々は、名前を書いた紙や旗を持って、港から駅まで一緒に歩いていました。私が家に帰ったら、砲術学校時代に、生まれを知らされた子が、もう三歳になっていて、感無量でした。

ラバウルの戦死者数は、前に申したとおり、約十三万人、残った兵力は六万人、内海軍一万三千八百四十人（四個警備隊計四千五百人）、その中の一人として私は生還し、現在も生きていることをかみしめております。それに引き替え戦死してしまった人たちの思うと、心が痛む日々です。特に本年は戦後五十年、長いような短いような五十年であります。